

座談会（HP掲載部分）

テーマ＜新学習指導要領の趣旨、内容と学校における体育指導の在り方＞

ボール運動について

後藤： 次に、ボール運動をめぐる課題についてお話を頂きたいと思います。これも、新しい学習指導要領作成に携わられた先生方に対する学校の先生方からのお問い合わせやらが色々あったかと思いますが・・・。

高橋： 早速、批判されています（笑）。

後藤： それをふまえてお願いします。

高橋： 要するにボール運動はものすごい数が多いですね。戦後は、バレーボールとバスケットボールとサッカーをGHQが持ち込んで、それをやるのが当たり前という形で実践されてきました。それも1つの方法なんですよ。それが代表的な典型的なスポーツだということであればいいんですけど、どうも近年の球技の広がりを見るとこれが全てではないと言うようなこともありまして、ゴール型、ネット型、ベースボール型、ターゲット型というように分類されるようになった。これは、ヨーロッパ、アメリカ、あるいは韓国もこういう方法論で分類されている。で、最終的にはこのカテゴリーの中であれば、何でも構いませんよというぐらい柔軟に学校に委ねているという国もあるんですよ。それぐらい球技は沢山ありますから、球技のカリキュラム体系をどうやって設定するかが求められたという事ですね。その時にスキルに着目すると分類が不可能だということなので、特にボールを持たない動きとか、あるいは戦術的な学習内容、この辺にターゲットをおいて、方向の分類が始まって定着をしつつあります。今回、日本もそういう中で一応まとまりを持たせたという事なんです。もう少し言いますと、そのカテゴリーの中のある運動を学習すると他の運動にも、特にボールを持たない動きは転移するという事なんです。例えばハンドボールを学習するとバスケットも上手くなりますよ、サッカーやっても上手くなりますよと。しかし、全てが全てにというわけにはいきません。例えば、ネット型で言うと相手の居ない所に落とすというのはバレーボールもバドミントンもテニスも一緒なのだけれども、じゃあそっくり一緒だろうかという若干違う所はありますよね。もう1つ、問題になりますのは、ゲームパフォーマンスを高めるには、ボールを持たない動きとボールを操作する技能とが一体となってやらなきゃいけないのだけれども、今回のような分類論になると、ボールを持たない動きばかり教えればいんだみたいな方向に走ってしまう可能性もあるので、やはり技能的な事柄も大切に教えていかなければいけないのではないかなと思います。

友添： 学校現場に出てやっぱりこのところをよく聞かれます。つまり、型で示す意味というのは何でしょうか？ということですよ。型ベースで示すことの意味が、あまり浸透していないということがあると思うんですね。大袈裟に言うと、スポーツ科学とか運動学の成果を初めて真正面から捉えて、それを学習の方法論として示したアイデアだと個人的には思っているんですけども。これまでは、球技で色々な種目をやってきたんだけど、やっておられる先生方が何の為にこの種目を教えているのかとか、これを教える事がどういう意味を持つのかということをおもひ考へなくてよかった。そういう意味で言ったらこういう型ベースに分けることによって、子どもたちに学ばせたい学習内容を特定して、そこからボールを持たない動き、あるいはボールスキルをしっかり教えるという意識をしっかり持つことが授業を行う上で重要になるだろうと思ってい

ます。ただ、本村先生もおっしゃったように、これのやり方を間違えるとおそらく大きな失敗に繋がるのではとも危惧しています。この失敗ってというのは何かと言ったら、先生方が授業の大半を戦術の説明にばかり費やしてしまって、子どもに十分なスキルの機会を保障しない事態を指しています。いまこそ、型ベースで学習することの意味を考えておく必要があるように思います。

佐藤： また、でっかい話に戻ってしまうんですが、豊かなスポーツライフを継続出来る人間を形成していくってというのは、12年間を通して考えていることをごさいます。1つそういった豊かなスポーツライフを継続出来る人というのは、もしかしたら1つの種目を生涯にわたってずっとやる人ではないかもしれないですね。ライフステージやライフスタイルによって楽しむスポーツ種目ってというのは変わっていいのだと思いますし、継続の仕方もまた異なる。“する”だけじゃないかもしれない、見たり支えたりという接し方もあるのかと思うんですよね。ただスポーツを好きでいてほしいし、身近にいて欲しいと。時間がある時にまた実践者として戻ってこられるような、そういった状況に常にある国民を育てる為にはどうしたらいいかという点は、基本原理だと思うんです。系統性というのも一本で走っています。系統性を考えた時に、例えばラグビーという種目を出した時に、高校で広がってくる種目を全部系統的に用意していくとしたらものすごい量を小学校の低学年の段階から種目で考えなければいけない。これは現実的に難しいですね。そうすると、やはり共通する生涯スポーツとした場合に反映しても再現可能かどうか、ぴったりではなくてもヒントになる動きを12年間の中で与えておくと。恐らくボール操作のコツにしても、そのものの形状は違うにしても、もしかしたら手首の使い方とか、そういった所はゼロじゃないですよね。もちろんタッチは違いますけど共通するものも当然出てくるし、そういう点に焦点を絞って学習を進めていく。逆に言うと、種目はなんでもいいかといったらそうではなく、やっぱり、国が歴史的に深められてきた記録というのはとても重要で、安定した様々な解説がありますから、その種目がなんでもいいよっていうメッセージに捉えられちゃうと危険かなと。1つの種目を継続的にある程度経験しながら深い楽しさを味わっていくのが大事だと思います。よく高校に行くと生涯スポーツなどと言って、わりとライトなフリスビーとか、“悪いとか、やっちゃいけないって言っているのではないですよ。”そういうものの能力をつける事が生涯スポーツの実践者だという捉え方が軸だとしたらそれは、どうかなと思うんです。1つの種目でより深い体験をすることによってスポーツの奥深さを知ることの方がまた違う種目に入った時にも自分の中で達成していこうという意欲に繋がるんじゃないかなと思います。で、本村先生もおっしゃられた何が変わるんだというご質問に対して私も個人的に感じているのは、ボールを持たない動き対しての意識が今、学校現場で大きくなっていると感じます。ボールを持たない動きをすれば新しい授業だというのは、ものすごくネガティブなメッセージになってしまっていて、技能が全く身につけていないのにいくらボールを持たない練習をしてもゲームは成立しません。やはり、もうちょっとその上にある、ゲームの様相が高まっていく、その競技がもっている本来の魅力や特性に近づかせることがねらいであって、そのためのボール操作であり、バランスよく学習されることが重要ではないかと思えます。後1つ、型別の特性があると思えます。特にゴール型のものは、かなりボールを持たない動きに意識を持たせる事によってゲームの様相が高まると思うんですけど、ネット型のゲームは、もうちょっと個人技能を高めなければ難しいかなと。それからベースボール型は、さらに個人的技能を高めないと本来の魅力や特性に近づいていけないのかなと思います。その辺をおさえた上で授業づくりしていかないと大変な間違いが起きるかなと思います。

本村： 確かに学習の転移が出来るというのはその通りですよ。例えばバスケットボールで10時間の単元でボールを持たない動きの学習とスキルの学習があったとすると、その中の3時間ボールを持たないでやったとして次のサッカーの時間では、その分の3時間はなくて済む。そうすると、バスケットボールでは10時間だったのがサッカーは7時間で済むわけですよ。単純に言えばですよ。そうするとその3時間分は、他の種目の

方に割く事が出来るわけですよね。端的に言えばそういう事もあるかなと。同じ型ベースであればあえてボールを持たない動きを繰り返しやらずともいいわけですよね。そう言った事ともう1つ気になることで、中学・高校では、ボールを持たない動きを今までも結構指導してきているんですよ。つまりアウトナンバーにせよインナーにせよ3 on 3の時の空いたスペースを作る、作った所に走りこむとか、そういうのは、3対2・4対2とかアウトナンバーで結構指導してきているんですよ。そうすると、ボールを持たない動きをちゃんと私たち今までやってきたよと。そんなに強調してるけど今までやってきた授業づくりとどう違うの？と、そういう考え方があるんですよ。だからこそ型ベースで提案をしたとなったら授業づくりはどう違うのかという事を特に中学・高校の先生方にストンと落ちるものを考え方と同時に具体的な授業研究レベルを示さないと中学・高校の先生はなかなか納得しない。その辺を懸念しているというところですね。

高橋： 私の印象から言いますと、中・高の先生もボールを持たない動きに当然球技の関係者の人は注目されて、指導されているケースは随分あると思うんです。ただし、専門的に先生方は運動をよく知ってらっしゃるから口で説明されるわけですよね。ところが、教材づくりという観点からみると極めて不十分だったんじゃないかと思います。ボールを持たない動きとか、あるいはゲームパフォーマンスを高めるためのゲームづくりって側面は、学校が大変遅れています。Jリーグのジュニアコースなんか行くと素晴らしい材料を提供していますよね。学校が遅れているっていう気がするんですよ。そういう意味で地域のスポーツの発展がいい刺激になって、やさしいゲーム教材や効果的なゲーム教材が、どんどん工夫されればいいんじゃないかなと期待しているんです。

友添： あの、こういう考え方はどうなんですかね。戦術学習と言うのは認識学習ですよ。どういうふうに動くのかを知的に理解していく、小学生は小学生の、中学生は中学生のペースで。そういう意味で言えば、今までの経験を重視したり、あるいは、ボールゲームを専門にしてきた中学校の先生とかが自分の経験で学んできたことを口頭で伝えるというより具体的なパフォーマンスとして意識的にそれを伝えていく学習論であるという考え方を持ってもいいんじゃないかなと思っています。

岡出： 問題は2つあると思うんです。白旗さんとドイツに行った時、盛んに言っていたいわゆるストリートフットボールに今のもろもろのものは、追いついてない。逆に言うとストリートフットボールって結構豊かな部分が含まれる。それが子どもの世界からどんどん消えている。子どもさん達が年齢段階に応じてゲームが出来るようになるための経験値を提供してもらえ、そういう材料自体が消えてしまっている状況の中で、他方でオフィシャルな種目群というのは、リクエストされる技術的な課題だとかもどんどん高度化していってますよね。そういう意味では、そこに一気にいくっていうのがなかなか難しくって、そのための材料も経験する機会もなくなっている。こういう中で1つの問題は、子どもさん達にゲームが出来るようにしてあげたい。ゲームが出来るようにしようとする、具体的に何を提供しないとだめなのか、とか何を学習させないとだめなのかっていうことを考え直さないと駄目な状況にきてしまったと思いますね。で、先程からでているようなボールの持っていない動き方だとか、ボールの扱い方とか、これも別にそれが出来るとゲームが出来るわけでは、ないですよね。例えば、バレーボールなんかでも個々の技術の練習はするんだけど、子どもさんにとっては、その事を練習する必然性は全然なくて言われたからやってるだけで、ゲーム中にどう使うかもわからないし、それが変わると何が変わるのかもわからない状態でひたすらやっている。でも、そうじゃなくてゲームっていうのは、ルールで解決する課題が入っているはずなんで、課題がわからないところで個々の事をやらされても、ゲームでは使わないしゲームやっている感覚がたぶんないですね。そういう意味では、やっぱりゲームが出来るようにしてあげたりするとゲームっていうのは一定の課題があるとか、そのためにこういう事が出来るといいなとか、子どもさんにとってもそれを学習する必然性が出てくる。だから

ボール持っていない動き方をいくら練習しても極端な例ではっきり出るのが、下手な人にボールを渡さない。まわさないと、そこで人間関係があからさまに問われるようなシチュエーションが出てきてしまう。長いスパンでみていくとその子達を引き上げていかないとチーム力が高まらないので、結果そこにいる人も楽しめる環境をつくらないととかそういう状況も出てきますよね。それは、たぶん高校生くらいの授業になると単元長くとれるんで、そこにターゲットをあてた学習なんかもっと出来ると思うんですよね。子どもさん達にそういう事をしていってあげたりすると、低学年段階だったらボールの扱い方みたいなのだけに特化できるような遊びが沢山あると、上の段階にいくともうちょっと知的にゲームの組み立て方とかを理解したものをもっていける。そういったゲームができるようになるという総体を考えていった時に、どの時期に何をどういう形でいつどうで教えてあげるといいんだと考え直すきっかけになる。いろんな協会の人達がいろんなゲーム出しているのはそうだと思うんですよ。でも、これも昔からあると思うんですけど、これ面白いからってそのまま授業に提供するんですけど、それやってしまったらどこに向かうの？っていうのが飛んでしまっているケースが結構あって。特に、学校の授業は授業実数限られているじゃないですか。だから年間実数のところで、ここら辺までいければ、次の段階に上っていけるんじゃないか、そういう見越しの中での位置づけ方というのが改めて問われるのではないかと。

白幡： その「型」という課題に関してきちんと正解できるかわからないんですけど今、岡出先生から話が出たことにも関連するところで解説を作っていく時に非常に悩んだところでもあるものですから、お話をさせていただきます。小学校の先生の特性かもしれないのですがけれども新しい課題が出るとどうしたらいいんだと、生真面目に悩んでしまってそこに走りすぎてしまうところがあると思っていました。また、「技能を身につける」という言葉に対して、効率的に身につけるにはどうしたらいいんだというような方向で、あるいはボールを持たない動きということ意識するあまり、ゲームではあまり活躍はしなくても、いい動きをしていたからいいと、勝ち負け以上に評価されてしまうのはどうかと思いながら今、課題意識を持っています。岡出先生からもお話があったようにその段階に応じたゲーム・ボール運動の中で「楽しさ」というのは、みんな違うと思うんですね。ボールを持たない動きも、先日ラモスさんとですね対談したんですけども、その時もボールをもたない動きをヴェルディの選手にどう教えるかが課題と言っておりまして、プロの選手でもボールを持たない動きは課題、小学生でも課題といった時に、非常に整理が難しいかなと。実は低学年では、ボールゲームという括りの中で型には分かれていないんですね。1つは、ゲームをしっかり楽しむ事ともう1つはボール遊びという事で、操作そのものを楽しんでいくという事を解説書の中に書いていると。次に中学年の段階では、「型」と一言で言っちゃっていいのかなということで「ボール型ゲーム」としました。で、よく課題になっていたのは、6年生と3年生が同じサッカーのルールでやっている。上手い子は活躍出来るけれども、他の子達は応援をしていたり、応援して自分のチームが勝ってよかった、だから楽しかったということで、果たしてこれでいいのかというところで課題があったと思うんです。そこで、これもどこまで言い切っていいものかというのがあったんですが、もう少しやさしいゲームやってくださいと。具体的にお話すると、中学年のボール型ではドリブルとは書いていないんですね。しちゃいけないという事じゃないんですけども、やはりみんなにきちんとやらせようとするのは大変難しいもので、これがない方がよりやさしいゲームとして楽しめる。やさしいゲームというのは、より子どもの実態に寄り添ったゲームづくりです。サッカーというのも、子どもの出来るサッカーのレベルは限られていますから、かなり子どもの実態を踏まえたゲームを作っていかなければならない。で、今度高学年になった時にも中学校の接続を考えておきますと、かなりスポーツに近づいてきますけども、やはりそれはあくまで難しい。中学年よりはもう一歩進められるけれども中学生まではいかない。それで簡易化されたゲームと、ややスポーツよりではあるけれども、やはり子ども達の実態をふまえた、子ども達が課題を達成出来るようなゲームを作ってください。というよ

うな事を今回書いているところがありまして、この辺りは非常に強調しているところです。やはり、その段階その段階で楽しめること、身につけられることがありますから、この辺をしっかりと先生達が持って、指導に活かしていくことが今回の指導要領で系統性、体系化ということを考えて作った意味に非常に繋がるのではないかなと思っております。

高橋： でもね、こういう刺激があってね、かなり現場ではね、おもしろい簡易化されたゲームを作り始めていると思うんですね。さっきおっしゃったように、ゴール型は複雑なんですよ。ネット型になると単純になってきてベースボール型になるともっと単純になるんですね。同じ足でボールを蹴るサッカー型のゲームでもゴール型でやる事も出来れば、低学年では卵割サッカーという形で攻守分離型で楽しむ事も出来ます。

さらには、ベースボール型でキックベースボール、あるいは、蹴りっこ、とりっこ、ならびっこなんていうものができます。だから、同じ足の運動でも簡易化出来る可能性いっぱいあるので、これからそれぞれがもっとやさしいゲームが作られることを期待しているんです。

佐藤： 座談会もそろそろ終盤かと思えます。どうしても体育は、技能を外して語れない教科だと思います。技能を外して例えば、態度の話だけ、知識の話だけでは体育の顔が見えてこないで技能を中心にならざるを得ないんですけども、いわゆるバランス。今回示させて頂いた技能、態度、知識思考判断という体育学習もっている学習の本質は、3つのカテゴリーをバランスよく育て頂くこと。これは、おそらく指導内容と学習過程、それから指導方法にも絡んでくるし、この後の習得・探究・活用も全部絡んでくると思うんです。いわゆる技能の習得を中心にしつつも、それを活用する時には思考が必要になってこないといけませんし、ゲームのある課題を達成するためには、協力するという態度であるとか、自分の責任を果たすというような態度が出てくると思うんです。もちろん、技能をずっと高めていけば、生涯スポーツ・豊かなスポーツライフを継続する人に最後繋がるのかと言ったら、そうじゃないと。もちろん技能を高める事は大事ですよ。でもそれ以上に仲間とうまくコミュニケーションする能力とか、自分で運動をプロデュースできる力、それに対しての体育的な価値をしっかりと感じてもらう国民をつくっていくことが大事だろうと。それがいわゆる、体育の系統性と言えるかどうかですが、発達段階に応じて教えるべき知識と、伝統の中でどうしても歴史的に体育で教えてきた態度と（一歩間違えれば要するに「しつけ訓練」になりがちかな）そういった側面を常に持っていると思いますし、外から期待をかけられる部分も非常に大きいと思います。一面では、それは体育というものが持つ効果としては、すごく大きな要素でありますから否定はしません。ただ、集団的な行動がきちんと出来たからその子の内面的な、例えば運動に対する愛好的な気持ちとか仲間への思いとかが変わるかといったらそうじゃないと思います。子ども1人1人によって思いの出し方が違いますから、積極的・中心的に、アプローチできる子もいれば、心の中で思っているもなかなかそれが表面化できない子もいます。そういう時に、教えるべき事とは仲間に対する尊厳性を保つとか、マナーを守る事とかの意味を教えて、そういった心構えを持たせることが非常に重要であって、内容としては簡単なこと、具体的な事から徐々に身に付ける付けさせていき、それが理念的なことに変わっていくようにしたい。そういう部分も含めて今回は、系統的と言っていいのかわりませんが、バランスよく先生方には指導して頂きたいし、体育の授業をつくって頂きたい。そこに習得・活用といった学習過程も出てくるだろうと思っています。

後藤： この間、ある学校の1年生の「体づくり」の授業を見せて頂いた時に、指導案に「重い物を運ぶトレーニング」という表記が目につきました。よく見たら、「 の運動遊び」と表記すべきところが、全て「 のトレーニング」となっているんです。やっぱり教科教科調査官のお2人が先程から心配されているような事があると思いました。この3月に筑波大学で、筑波大学と連携して研究している全国の教育委員会の関係者や学校の先生方が研究成果を交流する会があって、参加させて頂いたのですが、ある高校の先生が卓球を教

えるのにピッチ音を聞かせて、このピッチ音に合うように玉を打てという指導事例を発表されていました。ボールを打った後は、ラケットを額に持って来いとか、その素振りを何回もやるとかではなくて、ピッチ音を聞いてリズム感やイメージを持たせるわけです。こういう事が具体的に指導法を変えるという事なのではないかと思います。

また、プレルボールの例ですが、プレルボールはバレーボール同様にトス・パスをするんですが、そのトス・パス、あるいはアタックも含めて全部投げる動作としてプレーするんですね。アタックがシュートみたいな投げる動作なんです。敵陣に投げるってということで、まさに誰でもができるやり方で戦術それ自体を学んでいると思いました。技能的にやさしくするのは、いくらでもやるべきという提唱だと思いました。ピッチ音はやっぱり感覚的なものから指導した方がいいよという事を示唆しているんだと思うので、そういう事が最近の新しい研究成果を活かした指導なんじゃないかなと思うんですけども。本村先生がさっきおっしゃった、「授業にどう組み込むか」というのがずっと私の中でも気になっています。これからは、指導法についての具体的な情報を提供し合っていくことが重要ではないかと思います。

友添： 高橋先生、中教審の部会で随分関わられてこられたと思いますが、習得・活用・探究というのが出てきた経緯、そしてこれを体育でどのように引き取っていったらいいのかって、随分、現場では問題になっていて、極端に言うところある授業では、45分授業の中でここまでが習得で、ここから探究の時間に入って、最後まとめて活用やろうっていうような形の授業が出だしているんですよ。こういう事は本来の主旨ではないと思うんですよ。

高橋： まず、基本的には、今回の学力問題に根差していると思うんですよ。これまでは、課題解決力の育成の側面が、非常に重視されてました。その中で指導したり、あるいは習得したりするような事柄を強調する事が誤りであるような雰囲気が出てきたもんだから、中教審の教育課程部会は、実は教えることと学ぶこと、あるいは、先生が指導することと子どもが主体的に学習することは、二律背反ではありませんよということを強調したんです。始めは、とってもいいなと思ったんですけど、習得・探究・活用という3つが並んできたんで、これを体育でどう受け止めるべきかが話題になりました。実際、そんなに簡単に分けることできないんですよ。特に運動学習なんてそうだと思います。

友添： 算数・数学から出てきたものだと聞きましたが・・・

高橋： 多分そうだと思うんですけどね

佐藤： 要するに習得から探究につなぐというのは、授業ベースでは、習得を中心としつつも、それを使ったものをうまく授業の中で使うような活用的な活動ですよ。

高橋： 探究っていうのは、総合的な学習の時間のテーマであると、教科学習では習得と活用だと言うような言い方をしていますけどね。

佐藤： 何をもって習得、何をもって活用、何をもって探究っていうのは、体育では・・・

高橋： ボール運動なんて混在化していますよ。だからどちらかという習得に重みをおいた練習とか、あるいは活用と探究なんて一体化していますよね。

佐藤：順序性を示していませんというのも答申の中でも述べてますし、習得・活用・探究がなんぞやという論議をするために出したのではないという事も一応念を押しているんですけども、言葉としては出てきています。

高橋：結局は、教えることと学ぶこと、あるいは課題解決的な事柄と習得するような学習の両方が重要なんだということですね。

友添：学習過程の段階だという見方がで出していますよね。

高橋：それもおかしいと思うんです。だから1時間の授業の中で習得に重みを置いた学習もあっていいし、当然ながらそれを活用するという、例えば球技なんかまさにそうですよね。特に体育の場合は課題解決力の育成にかなり重きをおいてきましたよね。技能練習やればこれは悪だ！と言うような、あるいは古い体育だ！と言うような言い方がされてきたけどそうではないでしょうということですね。例えば今までの学習の過程でいえば、今ある力で楽しむ、あるいは出来そうな運動に挑戦する。このスパイラルはいいことなんだけれども習得する部分が何にもないとうまく展開しない。特に現代社会の子どもたちは、地域で何も身に付けてませんから。メロメロ状態で来るわけで、今ある力が何もないという状態から始めなきゃいけないわけですから。やっぱり少しは身に付けるものは身に付けさせる必要はあるだろうという事です。だから、今までの学習過程のモデルに若干修正を加えてみるのは如何でしょうかというのが私の提案なのです。

佐藤：恐らく、ある学習過程に代わるものは何だろうかを先生方は求める傾向が強いと思うんです。戻っちゃいますけど、発達段階によって教えるべきことを示した以上、そこにある到達の仕方というのは個人によってまちまちですから、簡単にこうやれば出来ますよ、なんて出せないんですよ。それは、各学校現場で創意工夫をして下さいというのが結論と言いますか、お願いにもなりますし、期待にもなるのかと。

友添：方法に関しては、基本的に学校サイドでやる。先生方が様々な工夫を加えてやっていくということ...

佐藤：指導力向上への期待ですね。

高橋：私も器械運動をモデルに考えてみたんだけど幾通りも考えられますよ。だから柔軟に、現場で取り組むべき事なんだと思います。

友添：「基本学習」と「発展学習」という組み合わせももちろんあるし。

佐藤：そのメッセージが恐らく、幾つか出てくることによって、先生方のヒントになるのではないかなと思います。

後藤：もう今それがいっぱい出てきていい時期ですよ。

高橋：そうですね。そうだと思います。

武道の必修化について

後藤：時間も迫ってまいりました。武道について、本村先生よろしいでしょうか。

本村： 武道については、武道だけが伝統と文化を受け継ぐんだという捉え方が学校現場の先生方にもあると思うんですね。なんでそうなったかという、やっぱり武道関係者が強く受け止めて強く発信してきたんですね。だから学校現場の先生たちもなにかしら、伝統と文化を武道が受け止めるんだという風なことで、かなり重荷に感じるところがありますよね。こうやってマスコミの報道も何故武道だけが必修になったんだという偏った報道があるんですね。それに戸惑う先生方がいらっしやる。でも、なにも伝統と文化は、体育だけ武道だけでなく、国語だって社会だって家庭科だってやるわけですから、肩の力を抜いてやって下さいねと僕は言ってるわけです。

あともう一つは、基礎基本を全ての子ども達にという4・4・4の考え方で、必然的に武道・ダンスみんな必修になったんです。その2つの理由をしっかりとおさえておいて欲しいと。武道関係者だけが言う押しつけがましい武道になっちゃうと先生方が元気が出ない。だからその辺、正しく理解してほしい。これ一番大事な所だと思えますね。その上で武道の指導をどうしたらよいか、施設のあるところとないところ、あるいは用具の準備が出来る所と出来ないところがあるかと思うんですよ。そうするとやっぱり、それぞれの各学校の実態に応じて工夫せざるを得ない。その工夫をする時に地域の指導者に可能な限り学校の方に入って頂いて、チームティーチングなど、そのことによって先生方も指導内容を地域の方から学び取ってもらう。但し、地域の方々、技術指導に陥りがちになるのでやっぱり学校体育の基本的な考え方とか授業づくりについては、しっかりとむしろ地域の武道専門家に対して自分が武道専門でなかったとしてもしっかりと考えた考え方で授業づくりを伝えていかないと授業づくりが崩れちゃう。その辺のところの兼ね合いかなと思います。

後藤： どうもありがとうございました。最後に一言づつ頂きたいと思います。

友添： 中・高の体育理論の授業の必修化についてもちょっとふれておいた方がいいかなと思います。今回の中・高の改訂で、変化の大きな柱になっているひとつに体育理論があると思います。大きな変化は、授業時間の設定の明確化はもちろんですが、「体育に関する知識」の名称の変更や学習内容の充実を含んで、中・高の一貫性を重視したことだと思えます。今まで体育理論の授業は、あまり重視されてこなかったように思っています。教室でやる事と体育館でやる事をミックスしながらやってきた部分があったんだけど、今度は各運動領域でやるもの、そして各運動領域で扱えないものを教室でやるということで、蓄積があまりない分、たぶん先生方は授業づくりや教材研究で困惑されると思うんです。早い段階で幾つかのアイデアが出てくる必要を感じています。最後になりますが、今年11月10日と11日に全国大会が島根県であって、島根の先生方が懸命に研鑽をつままれて移行期の今、新しい体育のあり方を研究されておられます。是非、全国の先生方には大勢参加頂いて、盛り上げて頂きたいなと思います。

岡出： 僕たちは逆に、学生さんたちにどのように伝えていくのか、改めて伝え方を考え直さなければなのかなと思ってますし、今、近隣の学校に入っていきような感覚で作りに出しているものも、もっと授業を見たり、話も聞きながら提案できるようなことを具体的に作っていかねばと改めて思いました。

高橋： 今回の大きな特徴は学習内容が明確化された。何を最低限保障するのかということが明確になったわけですから、これを確実にやっていこうと思うと、特に小学校は重要な役割を担っていると思うんですが、指導

要領はあっても教科書がないのはやっぱりおかしいですよ。ぜひ小学校に教科書を導入して、指導される先生がきちんと理解した上で指導していくということが重要だと思います。そういう意味で例えばスポーツ議員連盟の政治家に働きかけてはいますし、あるいはその意見が文科省の方にも伝わって、動き始めていくのかなと期待しているのだけれども、今度は学術会議でも、提案していくことにしています。とすることで、「是非小学校の体育に教科書を」と大きく叫びたい。もう一点は、大学の教員養成系の体育の指導ですね。この辺のところも、今までのような茫洋とした教員養成をやるのではなくて、最低限やっぱり、実際に小学校・中学・高等学校で指導することにターゲットをにおいて、実践的な能力形成・知識形成を図ってく必要があると思います。

本村： 実は、大学の教科教育、これを担当している先生方に情報が入ってないんですよ。つまり文部省の方は各都道府県教育委員会対象に十年ごとの改定のポイントを講習会でやるのだけれども、大学を対象に基本的に出来てないんですよ。これは、現行の指導要領の時も僕は所掌局と話をしたのだけれども、大学の方にちっともこの学習指導要領がどう変わったのか、その情報が入らない。全部先生の自主的な努力に任せるだけなんです。加えて、実技を指導する先生方に体育の授業づくりのことなんか情報入ってませんもん。つまり、我々は今までの授業づくり、技術構造的な特性に基く授業づくりは、非常に大学の先生にはマッチしていた。技術構造を明確にして、それをずっと追っかけていい塩梅に系統的に技術の指導をしていく、そして単元の最後には技術の評価・テストで技術が高ければ体育の評価は高かった。そういう技術構造の特性の時でしたよね。今そこから、相当変わってきたわけですよ、授業づくりが。そのことについて実技を担当される先生方は理解されていないということで、小学校を含めた中・高の教員採用試験、大学の教科教育、ないしは実技の教育に、この学習指導要領や授業づくりの内容は全くブラックボックス。そこを改善しないと本当の授業づくりの改善にはならないと思いますね。

後藤： 皆様どうもありがとうございました。以上をもちまして座談会を修了させていただきます。